

## 「東海林太郎伝説」の感想

チェルシー・ベッカー

2018年2月4日(日)の午後、秋田市でわらび座のミュージカル「東海林太郎伝説」を観ました。今回が日本で、もちろん秋田でも、初めての観劇であり、何を期待して行けばいいのかわかりませんでした。東海林太郎という名前も聞いたことがなかったため、前の日に少し調べてみました。いくつか基本的な情報を見つけました。東海林太郎は明治時代に秋田で生まれ、音楽に対する情熱を常に持ち続けたそうです。彼は名を成す前、大学へ行き、30代の頃に南満州鉄道会社で一時は働いたそうです。彼は最終的に国粹的な歌を歌う有名歌手になりましたが、後にその国民主義のために、戦後のアメリカ占領軍に検閲されてしまいます。これが劇場に入って行く時に、私が持っていた基本的な知識です。

私は国際教養大学で勉強するため、8月末に秋田に訪れ、それから5ヵ月、地域の文化遺産を訪ねたり、料理を試したり、歴史を学んだり、人々と交流したりして過ごしました。そのため、有名で歴史的な秋田県民についてのミュージカルを観に行けることになり、とても嬉しく思いました。秋田の田舎出身であっても、太郎は若い頃から大きな夢を持っていました。しかし、他のよくある成功話とは違い、太郎は自分の夢を早く叶えることはできず、親の願望、レストランビジネスの失敗、癌の治療などの障壁にぶつかりました。さらに、荒々しく残忍な戦争を生き抜き、愛する人たちの死を悼むことにもなりました。これらの障壁があったことによって、観客は彼の決意や功績に対してさらに驚かされるのです。貧困、戦争、死などに直面しても、彼が辛抱強く頑張ったのは、人々を幸せにする音楽で世界を満たしたいという一つの望みがあったからです。彼の妻や友達の粘り強く熱烈なサポートを見て、私は席の端で常に彼らの成功を応援したり、不幸を悲しんだりさせられました。

この話には、個人に関するものの他に、歴史的な繊細さがありました。20世紀の初めと第二次世界大戦、そして後のアメリカ占領軍については、日本ではいつもデリケートな話題です。この戦争は中国でも日本でも非常に多くの苦しみを引き起こし、日本人の国民意識に大きな影響を与えました。戦争の動機、戦争の結果、そしてアメリカ軍占領下での根本的な変化によって、本当の意味での“日本の国民主義”が問われることになり、明治時代の国民主義とはもはや同じではなくなりました。故郷に純粋な愛情を抱き、おそらく戦争による惨状の後のより良い未来を願って、太郎は国への愛を歌い続けました。

話自体もとても感動的でしたが、役者たちの才能の力も大きいと思います。観劇する前に、インターネットで東海林太郎の写真や映像を見ましたが、(東海林太郎を演じている)高野絹也さんの見た目や動きの似せ具合に驚きました。実際、劇の最中に役の感情がわからない瞬間は一度もありませんでした。役者たちの熟練した表情、感情のこもった台詞や歌を通して、役の感情が表現されていました。この劇では、4人の役者で多くの役を演じることになっていましたが、同じ役者が2、3個違う役を演じていても、少しも不自然に感じ

ませんでした。新しく登場してくる役は皆ユニークでエネルギーがあり、太郎の冒険や彼が道中に出会って関わった全ての人に、深みを与えていました。

いくつかとても心に残る場面がありました。ヤクザの場面とその次の場面の間の変わり目、戦争の場面、そして太郎が死後の世界から愛する人たちの声を聞く、最後の場面です。一つ目の場面で印象的だったのは、流れていた伝統的な音楽が、西洋の音楽が流れ始めても、すぐにはフェードアウトしなかったことです。二つの異なるスタイルの音楽が同時に流れていることによる不協和が、現代化や西洋化への欲求と、伝統文化を保持したいという欲求との間で戦っていた日本を象徴しているように感じました。二つ目に、戦争の場面が印象に残ったのは、その強烈さのためです。わらび座は比較的小さいステージと少ない小道具を使っていましたが、それにも関わらず、役者たちと舞台スタッフは毎回違う場面に変化させることができていました。戦争の場面では特に劇の雰囲気が一気に変わり、切迫感や絶望感が作り出され、太郎の亡くなった友への悲嘆に暮れた最後の歌がさらに雰囲気を強めました。三つ目の、太郎が死後の世界から愛する人たちの声を聞く場面は、この劇を、胸を刺すようなクライマックスへと持っていきました。太郎が歌い続けていたい理由、人々を幸せにするためということを出させるような、愛する人たちの最後の言葉が、私の魂に響きました。

最後に、もしかすると一番大事なこともかもしれませんが、観客がこの劇を愛していることは明らかでした。この話は日本のものというだけでなく、とりわけ秋田の話であったため、太郎がくせのある秋田弁で話す度に、そして美しい男鹿半島の景色をじっと見つめている時に、観客は感動していました。劇を通してたくさんの笑い声が聞こえてきて、今でも東海林太郎の音楽は故郷に幸せを運んでいることを知りました。